



「こんにちは 市長です」

7月20日号

優良河川愛護団体の表彰式というのがあって、七夕の時季になると県庁で知事と一緒に表彰状を渡す。各土木事務所から推薦された12団体が表彰されたが、代表の方は皆それぞれ年齢を重ねている。ボランティア活動で一級河川の清掃、除草活動を長年やってきたことが認められてのことだが、今の川辺は危険なところが多い。「無理をしないで」とあいさつで言うようにしている。

わが家の裏はずっと向こうまで、太田駅まで田んぼだった。四軒飯田と言われた本家たちはそれぞれ駅の周辺に陣取って、分家のわが家たちは広い田んぼを挟んだ南方の高台に造られていた。梅雨が間近になるといよいよ田植えが始まる。リヤカーが走れるくらいの幅の狭い農道が田んぼの中を不順列に並ぶ。柔らかい草が田んぼとの境に生えている。ヤギにはもってこいの餌であった。鎌を片手に草を刈り竹籠にいっぱい詰めた。ヤギの乳搾りも子どもの仕事だった。川には小魚がたくさんいた。飛び越えられるような小さな川に堰(せき)を張って田んぼに用水を流す。上流から田植えが始まるのだが、水が思うように張れず水争いも頻繁にあった。今のような水管理がされているわけではなく、土を掘って造られた自然流下の川は農家にとって大切なものだった。だから、堀りざらいをしたり川の周りの除草をしたり、川に密着して生活してきた。子どもたちは春にはフナを追い掛け、秋にはドジョウを捕まえに素足で川に入った。そんな川は今はどこにも見当たらなくなった。

「3歳児が川に転落し水死か 高知」という記事があった。高知県で七河川一斉清掃の中での悲しい出来事である。隣の栃木県でも那珂川(なかがわ)で子どもが亡くなった。『・・・小鮒つりしかの川』はなくなった。川には危険が潜んでいる。